

要旨

本研究では日中両国における先行研究および徳富蘇峰の著作により、蘇峰の中国観の変化を明らかにするために、二冊の中国旅行記である『七十八日遊記』と『支那漫遊記』との比較を行い、最後に内藤湖南の中国観との比較を行った。

徳富蘇峰（1863－1957）は近代日本における福沢諭吉（1835－1901）に続く最も代表的な影響力のある思想家であり、彼の思想と言論は近代日本の対外政策および日本国民に影響を与えたと言えるだろう。蘇峰の生涯は、明治中期から昭和日本の敗戦まで社会の最前線に活躍していた。したがって近代日本のナショナリズムを象徴する人物であり、また近代日本人の対中観が反映されている「日本の鏡」であるといえよう。

序論では日本国内における徳富蘇峰に関する先行研究の中から蘇峰の中国観に関わる主な研究の分析を行うとともに、中国における徳富蘇峰研究を取り上げた。

第一章では儒教に関する考え方として、先ず儒学者（俗儒）たちは見識がなく融通が利かないために、孔子や孟子の教えを重視しすぎるとともに、道德と自由とは両立せず儒教主義が最も完全な道德であると考えているとして批判していることを明らかにした。

すなわち蘇峰の考えでは人間の道德は良心と自由によって進行するものであり儒教そのものは必ずしも自由や道德と相反するものではないが、「儒教主義」は自由を否定しているため「自由主義」と並立することはできないとしていることを指摘した。蘇峰は孔孟を排斥するのではなく、後世の儒学者（俗儒）及び彼らによって形成された一種の「儒教道德」である「儒教主義」を批判していることを指摘した。

第二章では、日清戦争以前から戦争の勃発までの蘇峰の中国観を取り上げ、当初は民衆の優秀さや欧米の制度を採用しようとすることを評価して肯定的に期待する楽観論を述べていたことを明らかにした。しかし日清戦争の勃発後、蘇峰は欧米より古い歴史と力を持った中国が日本国民の世界における「膨脹」と対立する存在であると見ている。すなわち蘇峰にとっての日清戦争とは日中の具体的な対立関係を原因とするものではなく世界における日本の地位を決めるために中国をある種利用しようとした出来事である

第三章では『七十八日遊記』における蘇峰の中国観（鉄道や中国の社会に対する認識）、蘇峰は中国を「国家的観念がない」と評価している。中国を「文弱」な国とするとともに、中国の国民は「文弱的な国民」であり「力」による防御は出来ないが、冷静に打算することができるとしている。一方、蘇峰は「人種」としての中国人は他人を依存せず自活するとして肯定的な評価をしており、国家が消滅しても人種としての中国人は無視できない有力な存在と認めている。

第四章では、『支那漫遊記』における蘇峰の中国観（鉄道や中国の社会に対する認識）について、中国における鉄道の発展を見た蘇峰が驚きつつもそれを好意的に認めていることを指摘した。しかし蘇峰の関心は中国の鉄道の発展が中国にとってどんな意味を持つかではなく、それが日本にとってどのような利益となるかにあったのである。そのことは蘇峰の「力の福音」という考え方に通じる。すなわち、蘇峰によれば「力の福音」と

は侵略的な暴力ではなく、中国の独立を保障するために中国にとって必要な武力や兵力を指すとしているが、それは日本が中国に影響力を持つためのものであったことを指摘した。

第五章では、『七十八日遊記』附録『觸目偶感』と『支那漫遊記』附録『遊支偶録』の比較を行った。第一に両方とも中国は道路、人口、資源、軍備などの面において否定できないと評価していることを明らかにした。第二に『七十八日遊記』と比べると、12年ぶりの『支那漫遊記』では、中国全土で道路の工事が行われており、日本でも見られない最先端の機械が使われていることなどの当時の中国で起きた巨大な変化に驚くとともに、辛亥革命と第一次世界大戦後の中国を取り巻く国際状況の変化と中国の発展によって日本語教育の後退にも危機感を持っていたことを指摘した。『七十八日遊記』が蘇峰の鋭い中国認識を示すものであるとすれば、『支那漫遊記』では、蘇峰の中国に対する認識が中国を理解することは容易ではないという謙虚さに変化したことを明らかにした。

第六章では、蘇峰の中国観との比較のために歴史学者でもあった内藤湖南の2冊の著作から彼の中国観を取り上げた。湖南によれば国家制度の面について中国は共和制に向かっているとしている。また内治問題について湖南は中国は中央集権の制度を放棄すべきであり、役人に頼らず自分たちで治める郷團自治を組立て、人民による自治を実行することができると思っていることを指摘した。

このように、本研究では明治期の代表的な人物である徳富蘇峰の中国観について考察した。本研究は、徳富蘇峰の中国観の変化から当時の日本社会の国民の心理と中国観を考察することによって、日中両国の友好関係を構築するためには客観的な双方の利益とより深い理解が必要であることを明らかにする社会的意義があるといえよう。